

学校事例 8

九州 地区

宮崎県 宮崎市立西池小学校

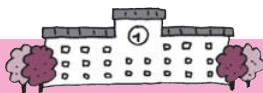
地域とのつながりを深め 心の基盤を 西池に持つ人」を育てる

どんな大人になってほしいか



- ふるさとを愛し、世界のどこにいても、心の基盤をふるさとに持っている人
- たとえ困難にぶつかっても諦めずに努力して、夢を実現しようとする人

そのための小学校の役割



- 子どもが「楽しい」「自分には大切な戻れる場所がある」と感じられる心の拠り所であること。そのために、教師も教育活動を楽しんでいるような学校であること
- 地域に必要とされる学校。そのために、積極的に情報を発信したり、地域とかかわったりすること

未来に残したい 西池小学校の力強さ

- ◎ 子どもにとっても、地域の人にとっても豊かで楽しい生活を送るきっかけの場となろうとしている。そのために、保護者や地域の協力を得ながら、その期待に応えられるように、学校から積極的に働き掛けたり、連携したりする取り組みを数多く続けている
- ◎ 学力向上のために、常に授業改善に努めている



宮崎市立西池小学校
研究主任 馬場義和
Baba Yoshikazu
「学校を取り巻くさまざまな物事、そして人に対して、常に謙虚さを忘れずに接したい」



宮崎市立西池小学校
教務主任 日高康朗
Hidaka Yasunori
「人に頼らず、困難を自力で解決できる人間を育てたい」



宮崎市立西池小学校校長
高山秀典
Takayama Hidenori
「子どもたちが主役であることを常に念頭に置き、楽しい学校をつくりたい」

School Data

設立	1955(昭和30)年
校長	高山秀典先生
児童数	871人
学級数	30学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒880-0027 宮崎県宮崎市西池町12-49
TEL	0985-24-2611
URL	http://www.mcnet.ed.jp/nishiike-s/
公開研究会	未定



教育熱心で協力的な 保護者の期待に応えたい

宮崎市立西池小学校は、県立図書館や県立美術館、宮崎公立大などがある宮崎市中心部の文教地区に位置する。大手企業の社宅もあり、教育熱心な保護者が多い。最近では卒業生の約3分の1〜5分の1が地元の公立中学校に進まず、国立・私立中学校、県立中高一貫校に進学した。

保護者や地域の学校に対する期待は高く、非常に協力的だ。例えば、地元にはプールがないため、PTAがプール委員会を組織し、約30人の保護者が運営を補助して夏休みの数日間、同校のプールを開放する。1日当たり平均200人前後もの子どもが集まるといふ。日程終了後、忘れ物はそのままとめて保管されるのが一般的だが、「プール委員長が「そのままでは臭くなってしまう」と、バスタオルや下着などを全て洗濯し、畳んで持ってきた。高山秀典校長は、「私は教師生活37年目になりますが、初めての経験でした。『おらが学校』という気持ちで支えていただいていることを実感しました」と語る。

落ち着いた学習環境にあり、学力的にも安定している同校に赴任した時のことを、研究主任の馬場義和先生は、「指導に専念できると思う半面、保護者の教育に対する意識が高いことにプレッシャーも感じました」と振り返る。教務主任の日高康朗先生も、「更なる学力向上のため

めに、私たちの授業力を常に高める必要性を強く感じました」と続ける。

ICT活用、授業研究、小中連携 学力向上とキャリア教育のあり方を模索

こうした保護者の思いに応えるべく、同校では学力向上のために新たな授業方法の研究や導入にとっても積極的だ。例えば、ICT活用の面では、2010年にモニターや実物投影機が全教室に配備された。教師は子どもの興味・関心を引くための導入部分を中心に活用。30学級のうち、常時半分近くの学級で使っている。11年度にはブログの更新や実物投影機の使い方など、ICT活用の研究会を開いた。

「以前の研究会では、時に厳しい言葉が飛び交うことになって互いの指導力を高めていきましたが、最近の研究会では互いの指導に口を出さないという風潮が強まっていると思います。しかし、本校の授業研究や職員会議では、厳しい意見も出るように工夫しています。互いに切磋琢磨するためには、物言わぬ集団ではだめです」

(高山校長)

11年度には、中学校区での小中一貫教育の推進に取り組み始めた。小学校2校、中学校1校の3校で、「夢と希望をもち主体的に学ぶ児童生徒の育成」学力向上と『自分さがし』の推進を通して」という共同研究テーマを設定。学力向上とキャリア教育を二本柱に研究を進めている。

ただ、それぞれの学校が積み上げてきた伝統もあり、共同での研究はそう簡単には進まない。

「小中一貫教育の良さや大切さは、教師全員が理解しています。しかし、各校には歴史と伝統があり、それぞれが思いを持って、教育活動に取り組んできました。学級担任制の小学校と、教科担任制の中学校とでは、教師の空き時間の取り方や、授業の進め方など、物理的に実現が難しい場合もあります。今後、中学校の教師が小学校の授業に入ったり、中学生が、出身小学校の後輩に体験談を話したりするなどの具体的な活動を通して、教師も子どもも、小中の交流を深めて、互いを理解していきたいと思っています」

(馬場先生)

3校による小中一貫教育の研究は始まったばかりだが、高山校長は少しずつ手応えを感じ始めている。

「子どもたちには単に知識量を増やすだけでなく、それを生かして自分の夢を実現していく力を付けてほしいと思っています。それはまさにキャリア教育そのものです。私たち教師はまだ勉強しなければならぬテーマですが、3校で協力して、9年間かけて力を付けるといふ共通理解が少しずつ深まってきていると思います」

子ども、教師、学校にかかわる誰もが 「楽しい」と思える学校に

先のプール開放の件のように、地域の人々が

同校に寄せるまなざしは温かい。しかし、子どもが地域に愛着を感じたり、地域に見守られている実感を十分に得られたりしているとはいえない状況にある。転勤してきた家庭やマンション居住者が多いことなどが、その理由だ。例えば、近隣の小学校はほぼ全員が子ども会に加入しているが、同校は3割程度。このため、子ども会が集団登校を担うことが出来ないなどの課題が生じている。

集団登校など目先の課題はもちろんのこと、長期的に見ても、学校が基点となり、子どもと地域、保護者と地域とのつながりをもっと深め、地域から必要とされる存在になりたいと、同校は考えている。

「子どもたちは将来、必ずしも地元に残るとは限りません。それどころか日本を飛び出して、世界を舞台に活躍する可能性も大いにあります。そうした子どもにとって、本校が心の拠り所でありたい。『自分には、大好きな戻れる場所がある』と思えるからこそ、困難と向き合った時にくじけず、夢を実現しようというひたむきに努力できると思うからです」(高山校長)

子どもが大人になっていつか帰りたいと思いい、地元の人々がもっと豊かで楽しい生活を送るきっかけの場となることで、西池小の地域がもっと活性化し、よい循環が続く。そのために、もっと出来ることがあるのではないかと高山校長は考えている。



写真1 民生委員と一緒に給食を楽しむ。この日は、体育館に集まって地域の話の聞いたり、下校時は一緒に歩いたり、1日かけて交流を楽しんだ(写真は2010年度3年生での交流給食の様子)



写真2 サマースクールで地域ボランティアの講師に書道を習っている様子。一つの講座につき複数の講師が対応するため、きめ細かく指導してもらえる。子どもの参加は任意にもかかわらず、毎年盛況だ

「地域の人たちが、自由に学校に出入り出来るような活動はないかと模索しています。例えば、朝学習で地域の高齢者の方が教えることがあってもよいのではないかと思っています」

日高先生も「子どものためになる活動というのが大前提となりますが、地域の高齢者に生きがいを提供することも、これまで以上に考えていきたいと思っています」と話す。

地域と連携した取り組みで 共に子どもを育む

こうした考えから、地域とのつながりを深めるための開かれた学校づくりを目指してさまざま

まな活動を行ってきた。特徴的な取り組みの一例を紹介する。

◎民生委員との交流給食(5月)

校区の民生委員約30人を学校に招待。1・2年生の教室に4〜5人ずつ入ってもらい、子どもと一緒に給食を食べる(写真1)。民生委員の仕事がどういふものかを、1・2年生にはまだ十分に理解できないが、給食を食べながら話をすることによって、子どもは自分が地域全体で見守られていることを感じる機会となっている。給食費は自費であるにもかかわらず、民生委員の人たちは、毎年、喜んで参加している。

◎校区内の危険箇所点検（7月）

各自治会長と教師と一緒に校区内を歩き、子どもにとって危ない場所を点検し、マップを作っている。自治会を教師全員に振り分け、日程の調整や点検する地域の役割分担など、自治会長との連絡は担当教師が直接行う。

また、教師は、地域の生涯学習担当や文化祭担当など、地域連携の何らかの役割を校務分掌に位置付けられ、出来るだけ地域の行事に参加する。例えば、馬場先生は公民館で開かれる地域の文化祭に2年連続で参加した。

◎サマースクール（8月）

夏休みの2日間、地域の人が講師を務めるパソコン講座や絵手紙講座、宮崎公立大の学生が教える学習講座などを開いた（写真2）。11年は児童約400人が参加した。

「学校を支えたいと思っていても、地域の方にはなかなかその場がありません。サマースクールは、自分の特技を生かしながら、子どもと接するよい機会となっています。書道の講師は80代の方で、『これが生きがいです』と毎年、快く引き受けてくれます」（高山校長）

◎地域ボランティアカード

加入率が低い子ども会の代わりに、子どもが地域の行事に参加して異年齢交流を行う機会として始めたのが、「地域ボランティアカード」だ。地域の行事に参加した際、主催者から専用カードに参加印をもらい、10個貯まると学校から賞状が渡される。行事の前には、担任が子どもた

ちに「今週末にこういう行事があります。参加してみましよう」と伝えることもある。

「地域の行事も子どももの参加率が低いと、今後の運営が危ぶまれます。そこで、学校が地域に協力してもらっただけでなく、学校も地域に協力するという意識の下、『地域ボランティアカード』を取り入れました。互いを活性化させようという意識を持ち、協力することが大切だと感じています」（高山校長）

◎ウェブサイトの充実

地域の人を含め、保護者に学校の様子を積極的にアピールするため、ウェブサイトによる情報発信にも積極的に取り組む。「学年別」「校長室」「給食室」などのブログを設けて、高い頻度で更新し、日々の学校の様子を伝えている。その充実ぶりは、全国的な小学校のホームページコンテストで入賞するほどだ。11年度には、「おすすめレシビ」と「保健室」のブログを新たに加えた。アクセス数は1日平均200に上るといふ。

「一人の担当者だけで運営しようとすると、担当者の異動と共に更新が滞りがちになります。本校では、担当者を一人置いていますが、教職員全員が更新できるようにし、常に誰かが学校の様子を伝えられるような体制としています。本校がどのような学校か、校長がどんな思いを抱いているのかを伝えられればと思い、私でもできるだけ毎日更新するようにしています」（高山校長）



高山校長が念頭に置いていることは、子どもにとっても教師にとっても、学校にかかわる大勢の人たちにとっても楽しい学校にすることだ。

「子どもにとって は、単なる一時的な快楽で楽しいと感じるのではなく、『勉強が分かった』という、本当の楽しさを味わってほしいと思います。その意味で、学力向上は、今後も学校づくりを支える柱となるでしょう。また、子どもが『楽しい』と感じるためには、指導する教職員も『楽しい』と思うことが大切です。『仕事だから』と受け身の姿勢でいては、より良い授業づくりのアイデアも湧かず、忙しい日々になってしまいます。世の中にはいろいろな職業がありますが、私は教師が最高の職業だと思っています。来年、定年を迎えますが、もう一度職業を選べるとしても、また教師を選びます。いかに世の中が変わろうと、人を教えられる仕事は教育者しかありません。先生方には、教師という仕事や自分の立場を誇りに思ってもらいたいと願っています。また、そう感じられるような環境を整備するのが、校長の使命であると考え、これからも努力を続けていきたいと思っています」